

## 第五十五回大阪河崎リハビリテーション大学認知予備力研究センターセミナー

2025年2月19日(水)10時40分から12時40分、4階小講義室において第55回CRRCセミナーがハイブリッド形式で開催された。河崎病院、水間病院、水間が丘、本学などから、大学院生も含め講義室に16名の参加があり、講演を挿みエーザイ株式会社から情報提供が行われた。

### 大学からの研究報告



言語聴覚学専攻松尾加代准教授より「認知スタイルとエピソード記憶の想起方法の関連について」と題してお話いただいた。共同研究者の杏林大学保健学部臨床心理学科三浦大志講師にもオンラインで参加いただいた。

認知スタイルとは、情報の獲得および情報処理の様式についての安定した個人特性のことを言う (Ausburn & Ausburn, 1978)。認知スタイルの分類のひとつに言語化型 / 視覚化型認知スタイル (Richardson, 1977) があり、言語化傾向が高い個人は言語的な情報処理を行い、視覚化傾向が高い個人はイメージ的な情報処理を行うとする。記憶の想起においても認知スタイルが関連するとされており、たとえば、Rey-Osterrieth 複雑図形の描写による記憶研究では、言語化傾向より視覚化傾向の成績が高かったという報告がある

(Casey et al., 1991)。出来事を目撃した際の記憶は、その多くが視覚的な情報

で構成されているため、視覚化傾向の強い人の方が言語化傾向の強い人よりも多く想起できると考えられる。一方、そのような目撃記憶を想起する場面として、たとえば警察での事情聴取のように言語的な報告が求められる状況では、言語化傾向の強い人の方が想起量が多くなるかもしれない。そこで本研究では、337名の大学生を対象に、記憶の想起量を比較し、認知スタイルと想起方法の関連性について検討を行った。参加者は車上荒らし未遂のビデオを視聴した後、①最初に言語記述を行い、その後スケッチで報告する方法、または②最初にスケッチを描き、その後言語記述を行う方法のいずれかで報告を行った。認知スタイルは、言語化型－視覚化型質問紙 (田村, 2007) で評価を行った。参加者245名のデータを分析した結果、絵を先に描く方法は、視覚化傾向の個人は言語化傾向の個人よりもより多くの正確な記憶を想起したが、言語記述を先に行う方法では、視覚化傾向と言語化傾向の正確な記憶の想起数に違いはなかった。本研究の結果は、目撃記憶のような視覚的な情報に関して、言語的な報告よりも最初に絵を描いて報告する方が、より多くの記憶を想起しやすい人がいることを示唆している。したがって、警察における事情聴取では、必ずしも口頭での報告から始める必要はなく、報告者が口頭またはスケッチのどちらかを選択できるようにすると、より多くの情報を得られる可能性があるだろう。

松尾先生の講演について、多くの質疑応答があった。言語化型 / 視覚化型の判定方法の正確さについて、本学の学生への応用可能性、本学の学生の学習能力向上のために新入生に対してこの判定テストを施行して、学生に合わせた学修方法を工夫することが可能かなどの提案があった。討論時間が大幅に延長されたことから、今回の文献紹介は延期となった。

## 特別講演



兵庫医科大学リハビリテーション学部作業療法学科学科長 小林隆司先生より、「フロー体験と健康」と題してご講演いただいた。

フローとは、生活に意味づけと楽しさを与える、強い没入経験を表現する概念である。フローでは、行動が自動的かつスムーズに進行し、よどみなく流れているような状態となる。スポーツではそれに似た状態をゾーンという。フローに入るには、①挑戦水準と技能水準の知覚が高次のレベルで均衡していることが重要とされる。実行者の技能が課題の難易度を大きく上回ると退屈になるし、課題の難易度が実行者のスキルを大きく上回ると不安になる。

フローはもともと社会学的な概念で量的な指標での裏付けが少なかったので、今までにいくつかの研究を行ってきた。「脳波を用いたフロー質問紙の妥当性に関する研究」では、主観的なフロー質問紙と脳波 (Fm $\theta$ ) との関係を検討し、質問紙に妥当性を与えることを目的とし、実験をおこなった。その結果、楽しいといった感情面と集中度得点において Fm $\theta$  出現率との相関関係が認められ、質問紙の妥当性が認められた。また、技術 - 難易度得点と Fm $\theta$  出現率との間で

正の相関があり、低い難易度 + 高い技術でも、リラックスできるため、フローに至ることが示唆された。「作業によるフローが生化学的ストレスマーカーに及ぼす影響」では、作業遂行におけるフローの程度とストレスとの関係について生化学的データを用いて検討することを目的とした。作業前後で、精神的なストレスマーカーであるクロモグラニン A には変化がなかったが、コルチゾールではストレスが軽減した。また、フロー質問紙の集中度とクロモグラニン A の低下率とは相関が認められ、作業に集中できれば、精神的なストレス軽減効果があることが示唆された。

「高齢者の没頭体験と健康関連 QOL」では様々な作業における没頭体験頻度が、健康関連 QOL の身体的側面と関連していることが明らかとなった。

Occupy という語には没頭するという意味があり、Occupational Therapy はフローをもたらすような作業にかかわって楽しく治療することある。作業中にフローを得ることは、変性意識状態により大脳皮質の働きを一時的に抑制し、辺縁系や脳幹といった脳の感情や生命活動をつかさどる部分を活性化させるという効果が期待される。そして、生活に作業によるフローがあることで、私たちは健康を維持・改善することができると思う。

小林先生の講演についても多くの質疑応答があった。特に本学でも行っている Fm $\theta$  を誘発する作業とフロー体験との相違についての質問が多かった。作業療法がフロー体験をもたらすことを目標にすることについて賛同する意見も多かったが、実際に作業療法を目指す高校生にこのような魅力的な学問領域であることを広く推し進めるためにはどのような方法が考えられるかという点についても議論された。

小林先生の講演についても多くの質疑応答があった。特に本学でも行っている Fm $\theta$  を誘発する作業とフロー体験との相違についての質問が多かった。作業療法がフロー体験をもたらすことを目標にすることについて賛同する意見も多かったが、実際に作業療法を目指す高校生にこのような魅力的な学問領域であることを広く推し進めるためにはどのような方法が考えられるかという点についても議論された。

## 次回 CRRC セミナーのお知らせ

第 56 回 CRRC セミナーは、2025 年 4 月 24 日 (木曜日) 10:40-12:40 に開催予定です。2025 年度から開催曜日を水曜日から木曜日に変更いたしますので、お間違えのないようよろしくお願いいたします。講演者として、一般社団法人アウトドアコミュニケーション珠数美穂先生による「Green Hospital Project」と本学理学療法学専攻村西壽祥准教授 (講演題未定) による講演及び論文紹介を予定しています。会場でもネットでも参加できますが、会場にご参集の方はお弁当準備の都合がありますので、事前に本学事務庶務係 <soumu@kawasakigakuen.ac.jp> にお申し込みください。